



るうてる



2021年
7月
No.883

■発行所■
日本福音ルーテル教会事務局広報室
〒162-0842 東京都新宿区市谷砂土原町 1-1
電話 03-3260-8631
■ウェブサイト■ <https://jclc.or.jp/>
■E-mail■ jclc@jclc.or.jp
■発行人■ 李 明生 koho@jclc.or.jp
■印刷人■ 精文堂印刷株式会社
■定価■ 1部 40円（郵税を含む）
■振替口座■ 00190-7-71734

説教 「主に献げて委ねる」

日本福音ルーテル湯河原教会・小田原教会牧師 岡村博雅

「さて、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。」
（ヨハネによる福音書6章11節）

（ヨハネによる福音書6章11節）



しかし主はこの心からの献げものを喜んで受け取られた。そして弟子たちに命じておよそ5千人もの人々を座らせると「パンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。」（ヨハネ6・11）。四つの福音書が異口同音に人々は満腹した、「残ったパンの屑で、十二の籠がいっぱいになった」（ヨハネ6・13、マタ14・20、マコ6・43、ルカ9・17）と証言します。一体何が起こったのか？四つの福音書が、パンと魚を持っている家族がいた、それが主に献げられた、主はこの献げものを神に感謝し、祈り、人々に分け与えられたと語りま



伊藤大奈

⑯「行きたいですか？」

「教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です。」

（エフェソの信徒への手紙！：23）

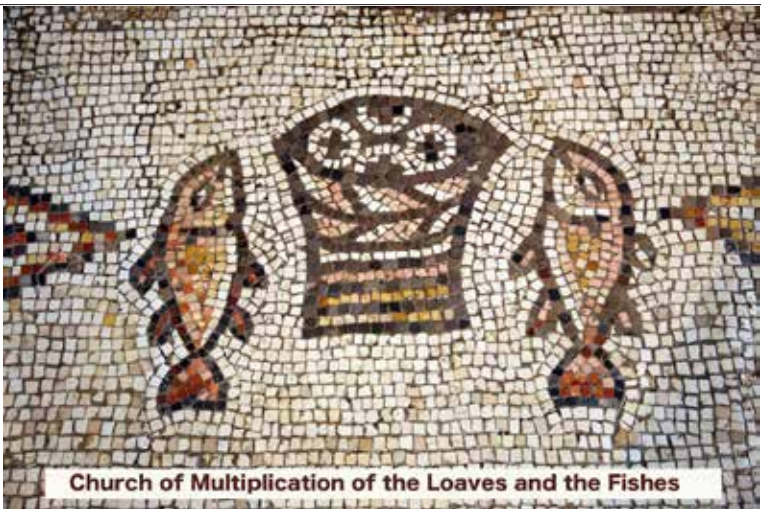
「教会へ行きたいですか？」と質問したことを私はすぐに後悔しました。なぜかと言うと、いつも明るく笑っていたその人の目からポロポロと涙が溢れていたからです。

同じようにいろいろな状況に置かれて、いろんな理由の方がおられます。その全ての理由や状況をわかつておられるのが神様です。あなたが隣人のために行動していることを神様はわかつておられます。

くしゃくしゃになった表情の口から絞り出すように言われた一言は「行きたいよ。」でした。病気で長く入院を繰り返しておられる彼女は、何年も教会には行かれておられないとのことでした。私が彼女の向かいのベッドに入

院した時は嬉しそうに自分はクリスチャンだと話され私と向かい同士だと喜ばれた矢先のことでした。私は心の中で「ごめんなさい」を繰り返していました。

るうてる法人会連合研修会のお知らせ 詳しくは4面で



Church of Multiplication of the Loaves and the Fishes

「パンの奇跡」は四福音書のそれぞれが物語る唯一の奇跡です。弟子たちにとってこの奇跡ほど印象深いものはなかったでしょう。日が傾きかけた頃、ベトサイダの「人里離れた」（マコ6・35）草地で起こったあの出来事の消息を思い巡らします。それは私たちのこころざしを主に信頼して委ねたときに、主が私たちの思い

を超える豊かに用いてくださった奇跡のように思われます。

四福音書の中でヨハネだけが主イエスと弟子のフィリポやアンデレとのやりとりを実に生き生きと伝えていて、これは現に起こった出来事だったと感じずにはおられません。

その日、主はご自分を慕ってくる群衆を見て憐れまれ、この辺りに土地勘のある「フィリポ」（ヨハ1・44）に「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」（ヨハ6・5）と尋ねました。ヨハネ福音書は主が「フィリポを試みるため」（ヨハ6・6）にそのように問われたと述べています。

するとフィ

リポは、「めいめいが少しづつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」（ヨハ6・7）と婉曲に断りました。200デナリオンは労働者の半年分以上の賃金に相当します。たとえ少しづつ配るとしてもかなりの金額です。フィリポは主のこの群衆への「深い憐れみ」（マコ6・34）に共感したものの、とても現実的ではないと結論したので

しょう。他の弟子たちも同じ考えだったようです。共観福音書では、ここで弟子たちは「人々（群衆）を解散させてください。そうすれば、自分で周りの里や村へ、何か食べ物を買っていくでしょう」（マコ6・36、マタ14・15、ルカ9・12）と進言し、これに対して主は「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」（マコ6・37、マタ14・16、ルカ9・13）とお答えになります。

主と弟子たちとのこうした会話は側にいた人たちにも聞こえたのではない

かと想像します。群衆は15キロもの距離をやつてきたと考えられます。群衆の中には自分や家族のためにパンや魚を持ってくる者がいても不思議はありません。「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」という弟子たちへの言葉を、「主はこの私にも呼びかけられた」と聴きとつて心を開いた家族があつた。彼らは主を信じて、持っていたパンと魚を主に

お委ねしようと決意した。だから一人の少年が立ち、精一杯の献げものであるパンと魚を差し出してくれたのだと思います。

アンデレは急いで主に報告します。「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます」（ヨハ6・9）。そしてつづき、そこにはきつというの時代でも、今も、あの時のように「神の国」のように世界が実現します。

十



8/23
（予定）
（2021年）

るうてる法人会連合研修会

COVID-19下での
悲嘆とそのケア

※開催日時
8月23日（月）14時～17時
※開催場所
日本福音ルーテル教会事務局
※参加費
無料（食料は別途）
※申込締切
2021年7月30日（金）午後5時
※申込方法
日本福音ルーテル教会事務局
電話 03-3260-8631 FAX 03-3260-8641
Eメール soumu08@jclc.or.jp

るうてる法人会連合研修会のお知らせ 詳しくは4面で



議長室から 大柴謙治

「ルターとボンヘッファーにおける罪の赦しの神学」(1986)。当時29歳の私にはまだ「罪責感情(罪／Guilt)」という次元しか見えていませんでした。9年の牧会経験を経て米国で学ぶ機会が与えられます。2年の格闘の末辿り着いた主題は『Ministry to the Shame-bound Japanese』(1997)。人生の午後が始まろうとする40歳にしてようやく「羞恥感情(恥／Shame)」の次元が見

恥と罪

のに対し、恥は存在自体の次元における痛み／悔いです。存在は行為に先立ちその前提となつているように、恥は罪よりも深いところに位置する。「恥ずかしくて穴があつたら入りたい」という表

現が自己の存在を抹消したいというところからそれは分かります。現に聖書では恥の方が罪より先に登場します(創世記3・6～10)。また、強い恥意識を持つ人は強い誇りの意識をも併せ持ち(職人気質など)、両者は一対、表裏一体です。罪からの解放には「赦し」が必要ですが、恥からの解放にはあの放蕩息子(父親のようにな、)「ボロボロになった惨めな(無力さをuncoverされた)自分をありのまま受容(accept)してくれる愛」が必要なのです。

「恥の多い生涯を送つて来ました」と主人公に語らせたのは太宰治『人間失格』。遠藤周作がキリスト教を「母なる宗教」と呼ぶ時、自らの無力さと恥に苦しむ者をそのまま抱きとめ

与する重要性から、「(神の)民の業」である礼拝という側面が目ざされてもよいでしょう。教会は「礼拝する民」の共同体です。そのために、礼拝において様々な奉仕、役割が私たちに与えられています。定められた時間、定められた場所に集うところから始まります。その神の民の業に仕える司式者の重要性はいまでもありませんが、何より会衆、礼拝に集う一人一人が、恵みに与るだけでなく、応答し参与する者として、奉仕と役割を担っていることを確認しましょう。

「教会賛美歌増補」解説



⑬賛美歌委員からの声(8)

讃美歌委員会

石丸潤一

(西日本福音ルーテル新田教会牧師)

千葉県市川市にあります西日本福音ルーテル教会新田教会で牧師をつとめています、石丸潤一と申します。

『教会賛美歌増補』の編集のため、四つのルーテル派教団から讃美歌委員会が構成されました。私は、当初委員をつとめてくだ

さつた当教団の小賀野英二牧師、ハリー・フオウイネン宣教師の後を継ぐかたちで、委員に任ぜられました。以来、委員の働きをつとめる間に、関西、山陰、関東と牧会の働きの場が変わりました。それだけ多くの年月がかかったにもかかわらず、「分冊Ⅰ」の発行間近である今でも、まだ作業が足りないと感じます。原曲の選定、新作賛美の募集、外国作品の翻訳、訳詞の作成、伴奏の編曲、楽譜の体裁の統一、著作権のチェック、等々。1冊の賛美歌集の背後に膨大な作業が隠されていることを、委員となつて、初めて知らされました。

私は、教団の賛美委員会や韓国の賛美宣教師の奉仕(韓国語賛美の訳詞作成など)にも携わらせて頂いています。音楽や文学の専門的な学びを修めたわけではなく、「賛美が好き」という程度の者です。讃美歌委員のつとめには分不相応と常々感じていました。ですが、神様は、委員の働きを通して、恵みに気付かせてくださいました。様々な編集作業に携わること、私の信仰生活が、先人のすばらしい信仰と賜物とバイタリテイの上に立って頂いていたことを思い起こされました。また、音楽に造詣の深い他の委員の

皆様が私たちに与えてくださったことを感謝し、さあ、とにも賛美を始めましょう。ルターのコラールは、私たちが忘れてはならない信仰の根を教えます。新しい日本の賛美歌は、時と空間を超えて今に受け継がれてきた信仰の根から咲いた色とりどりの花のように、神様の栄光と信仰生活の喜びを証しします。

現在、新型コロナウイルス感染症の下、この当たり前だったことが、そうではないことを改めて知らされる経験をしています。整えられた礼拝堂で、司式者の下で共にみことばを聞き、賛美し、祈り、聖餐に与ることが、まさにかげがえのない恵みであることを痛感します。また、今回のハンドブックでは、これまであまり触れられてこなかった「信徒の礼拝奉仕」の項目が加えられました。もちろん、これまでも各教会で様々な奉仕がなされてきました。まず特別な賜物の奉仕として奏樂があり、信徒

私たちの礼拝

―式文ハンドブック―

⑫信徒の礼拝奉仕



松本義宣(式文委員会委員長・東京教会牧師)

礼拝(Liturgy)を表わすギリシャ語はレイトゥルギア、原意は「民の業・働き」です。新約聖書では、ヘブライ語の「祭儀」の訳語として用いられています。もちろん、礼拝はまず神様が人にみことばをもつて奉仕してくださる出来事です。その恵みに応答する意味で、しかも私たち全

説教者もあります。他にも聖書朗読、献金やお祈りなどの担当等です。しかし、現在、常に礼拝時に牧師(教職)が司式を担当しない状況も出てきました。あるいは、この感染症下によりモート(オンライン)礼拝に、個人や家庭ではなく一定の人数が集って与るといふこともあります(既になされてもいます)。信徒によつて司式がなされ、説教原稿の代読といった重要な奉仕が担われてもいます。

これは、礼拝を司る役目の牧師数の減少という課題に対応する側面だけでなく、もつと積極的に、本来の意味で「会衆」が参与し、神の民に仕える「信徒の礼拝奉仕」が見直され、新たに位置づけられていくことが求められているからです。

また、それは礼拝での様々な担当だけではなく、受付や新来会者、高齢者や子どもたちへの配慮、マイク等の整備等、すべてが大切な奉仕と役割であることを、改めて各教会で話し合い、担

全国教師会 オンライン集会報告

立山忠浩
(全国教師会会長・
都南教会牧師)

連休最後の5月5日に全国教師会オンライン集会を開催しました。初めての試みでしたが、60名もの参加がありました。全国教師会の総会は、2年ごとに開催される教会の全国総会の前日に開くことになつていますが、全国総会が来年5月に延期されたので、それに合わせて来年に延期しました。2年に一度、教師全員が一堂に会する貴重な機会を失ったことになりました。それに加え、3、4年ごとに開催する退修会も、本来ならば今年の秋に開催する計画でしたが、断念せざるを得ませんでした。新型コロナウィルスに翻弄された形です。

オンライン集会を開催した理由は、延期された教師会と退修会を穴埋めするためです。一堂に会することはできませんが、画面を介して互いの音信

を分かち合い、元気な姿を確認し合う恵みの機会となりました。

教会規則には教師会の任務が記され、諸事項を適切に処理する役目が明記されています。例えば「教理、神学に関する共通の理解に関わる事項」とあります。教理や神学に関することでの教師間の共通理解を求めています。霊的修養や生涯研修、宣教に係わる事項なども列記されています。

ただ、教師会の任務を語る前に、整えなければならぬ課題があることを痛感しています。以前から内在していた課題が、このコロナ禍によって顕在化しているのです。牧師不足の深刻さがさらに増し、1人の牧師が複数の教会を牧会することが当たり前です。教会と関連する諸施設や幼保園・こども園などの業務も多くの牧師が担っています。いずれも宣教上極めて重要な働きであるゆえに、その任を託される牧師は懸命に励んでいます。どこかでからだの悲鳴を上げているように思えるのです。私に妙案があるわけではありません。でも教会全体で考えなければならぬ構造的な問題です。

宣教の地に牧師は1人で派遣されます。本来孤独は避けられません。しかし宣教の地での現実について語り合い、分かち合える仲間がいるならば、きつと孤独感や孤立感から逃れる道が見つかるのではないかと。まずここから取り組みたいのです。教師会で始まった試みは、今秋のオンライン退修会へと継続されることになります。

コロナ時代の 説教と聖餐

牧師のための
ルター・セミナー
(2021年報告)

江口再起
(ルター研究所所長)

5月31日、6月1日にルター研究所恒例の「牧師のためのルター・セミナー」が開かれました。しかし今年のセミナーは例年とは少し違う形で開催。一つはコロナ禍のためウェブ会議方式 (Zoom) で開かれたこと、そしてもう一つはセミナーの初心にもどって、牧師の真剣な討議の会としたことです。

コロナ禍の困難の中にあって、牧師こそが先頭

に立つて、改めてもう一度教会が直面している諸課題について学ぶ必要があると考えたからです。

というわけで全国から1日目約60名、2日目約50名の牧師(現職、引退)と神学生が参加しました。主題テーマは、ズバリ「コロナ時代の説教と聖餐」。教会にとって一番大切なことは、言うまでもなく「説教」と「聖餐」ですが、このコロナ禍にあつて、いつも通り礼拝ができなかつたり、オンライン礼拝に切り替わつたり、聖餐式ができなかつたり、今、全世界の教会において歴史上、体験したことのない変化が起こっています。この問題をどう考えるべきか。

1日目午前はシンポジウム「コロナ時代の説教」。後藤由起(本郷教会)、小泉基(函館教会)、神崎伸(天王寺教会)の各牧師より実際の教会現場からの説教事情と課題をめぐって発題がありました。

午後は立山忠浩牧師都南教会より「説教と聖餐」について、ルターの著作と聖書を繙きつつ講演がありました。

リアクターは高井保雄牧師(引退教職)。ヨハネ福音書4章にでてくるイエスとサマリアの女の問答を

めぐり「まことの礼拝」とは何かが問われました。

2日目午前は、宮本新牧師(神学校)より講演「ルーテル教会という構造」礼拝・教会・宣教」がありました。

アメリカ福音ルーテル教会のコロナ対応の問題を糸口に、そもそもルーテル教会とはどういう教会なのか、いったい礼拝とは何か、そして改めて伝道(宣教)は今日という時代において、いかにあるべきなのか、問いだされました。リアクターは大柴譲治牧師(大阪教会)。

2日目午後は、全体討議「ルーテル教会はどこへ行く?」ポストコロナの時代を見ずえて。参加者全員でコロナのこと、教会の過去・現在・未来、そしてその中の牧師の使命と実存などと、喧々諤々。もとより教科書的な正解があるわけではありません。しかし、このように信仰について、教会について、説教について、聖餐について、かくも熱く真剣に話し合い、学び合うところにこそ、ルーテル教会の伝統と、そして未来があることを実感できるセミナーとなりました。

アメリカ病院聖職者 チャプレン報告3

関野和寛

日本福音ルーテル教会の留学制度を利用して昨年よりアメリカ、ミネソタ州の病院でチャプレンとして週5日、フルタイムで働き出し、もうすぐ1年になろうとしています。コロナ室と精神科病棟が私の担当でしたが、ワクチン接種開始から半年コロナ入院患者は激減し、コロナ患者よりも一般患者の看取りや家族のケアをする時間の方が多くなってきました。一般病棟の患者、家族のケアの中にはアメリカの社会問題が凝縮されています。アメリカの自己破産の大きな要因は医療費であり、コロナショックにより失業、車や家を売り入院費用を賄わなくてはならない人々がいます。ベトナム戦争、イラク戦争のトラウマで苦しみ入院している患者の元に駆けつける夜もあります。また非常に驚くことにこちらで

は家族や近親者が殺人事件に巻き込まれ癒える事のない傷と共に闘病をしている患者がとて多く、そのような苦しむ心に向き合う働きをしています。ここミネアポリスでは犯罪率がコロナパンデミック前の何倍にも跳ね上がっています。経済が回復方向に向かっているように見えますが、格差断絶、マイノリティーが貧しい人々の苦しみは日に日に大きくなっています。

病棟を周りそのような

患者と向き合うという事は、一人ひとりと向き合うということと同時に社会問題、そして世界の痛みに向き合うことなのだと感じています。そしてその大きな傷の前にチャプレンは無力で解決策を持つていません。けれどもその無力さからでる共感、そして祈りの中に神が働く事を信じて日々努めています。この秋からはここで得たものを持って日本の神学校で臨床牧会訓練の指導に参加させていただきます。

「写真」チャプレン室は各宗教に対応できるように準備が整えられている



